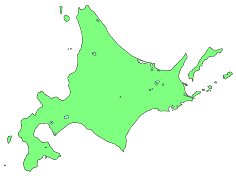
日本の科学者ＶＯＬ.54　ＮＯ1　2019 年 1 月 1 日　　発行　付録

JSA　北海道支部第 3 水曜の会



ニュースレター

№498 発行：日本科学者会議北海道支部第 3 水曜会

〒011-0022　札幌市北区北 22 条西 2 丁目 1-2　静麗荘 32 号室
Tel/Fax：011-707-2299

☆「朝鮮から来たキム君」☆幌加内で朝鮮人強制連行時の犠牲者の霊を弔う追悼式　行われる

朝鮮から来たキム君

前田　満

小学校４年生のときに２人の朝鮮の子供がＭのクラスに編入されてきた。彼らは「金山」と「金平」の日本名で呼ばれていた。金平は片言しか話せなかったが、３、４歳の年上の金山は日本語がうまかった。総合得点ではＭの方が上だったが、国語以外の算数や理科の彼の成績はいつもトップクラスだった。言葉が通じないだけに、クラスの悪童たちは金平の朝鮮語を真似てバカにしていた。

しかし彼らは、勉強が良くできて大柄、体操万能の金山には、近づきがたい威圧を感じていた。

こうしたクラスで、どちらかともなく、我路小から転校して以来、友達の少なかったＭと金山が急速に仲良くなり、判りにくい日本語をＭが教えたり、金山に朝鮮語を習ったり、本を貸し合ったりした。こうして付き合ううちに彼は次のようなことを打ち明けてくれた。

「日本語が上達しないと学校に入れないので、そのような子供が」まわりにたくさんいる」

金山は４年生が終わると、どんな事情があったのか知らないが、退学した。それから２年後、「太平洋戦争」が始まった。翌年、Ｍは岩見沢中学に進学した。その頃、炭鉱市街では休日になると、哀調を帯びた「アリランの歌」を唄い、鼓を打ちながら片足で跳ねるようにして踊る人だまりを見かけるたびに、金山を思いだした。Ｍの進学後は、「援農」や炭鉱へ「勤労動員」に駆り出されて働いていたので、その彼のことをすっかり忘れていた。

やがて戦争が終わった。しかし、食糧不足と窮乏生活は戦中よりも一層ひどくなった。強制連行されてきた中国人(Ｍたちには、捕虜だと聞かされていた)たちが暴動を起こした。彼らは集団で探鉱事務所の幹部を探し出し、壇上に立たせて「飢えと過酷な労働によって構内で死んだ同胞に謝罪

せよ」と激しく糾弾していた。やがて彼らは、特別列車を仕立てて中国に帰ったが、家族で来ていた朝鮮の人達はしばらく炭鉱に留まっていた。

ある日、集会所の傍を通った。その会場で朝鮮の人たちの集会が持たれていた。日本人労働組合の赤い旗なども立っていたから、これらの団体を支援する集まりだったのだろう。窓から覗きこむ人たちがいたので、つられてＭも窓に飛びついて覗いた。驚いたことに金山が壇上で朝鮮語による演説をしていたのだ。数年前まで同級生だった彼に間違いなかった。

その年から次第に、炭鉱で働く朝鮮の人たちの数が減った。それからさらに数年後、三菱美唄炭鉱は閉山した。

〈付記〉アジア太平洋戦争の末期に、北海道の炭鉱では、"応召"で少なくなった労働者の穴埋めに、植民地支配下にあった朝鮮半島から、半ば強制的に朝鮮人(半島人)を45000名と占領した中国東北部から"捕虜"と偽って、中国農民を約5000名を連れてきて、炭鉱で働かせた(札幌通産局調べ昭和28年より)(「中国人」が農民であることを、中国へJICA派遣のさい確認した)。

幌加内で朝鮮人強制連行時の犠牲者の霊を弔う追悼式　行われる

アジア太平洋戦争時に上川管内幌加内の朱鞠内で、雨竜ダムと深名線建設のため朝鮮半島から労働力として強制連行(徴用)され、無念のうちに亡くなられた人々を弔う初の追悼式が昨年の１０月２７～２８日に「笹の墓標展示館」で行われた。

追悼式を行ったのは、日本、韓国、朝鮮、及びアイヌの若者たちによる遺骨発掘と歴史認識の共有によるワークショップを通じて新たな人間関係の樹立を目指す活動を行ってきている市民ネットワークのＮＰＯ法人「東アジア市民ネットワーク」(殿平　善彦)が主催した。

「記憶　継承」という文字が刻まれた追悼碑(１昨年の１０月に完成)の前に集まったのは、地元住民をはじめ札幌韓国総領事館の領事ら約３０人で、僧侶の読経の後、無念にも亡くなった犠牲者を悼んで献花が行われた。

朱鞠内には、朝鮮人が約３０００人いたほか、国内各地から集められたタコ部屋労働者数千人も働かせられていたが、このうち工事で犠牲になった人々は、朝鮮人で４５人、日本人で１６８人とそれぞれなっている。

こうした過酷な強制労働の歴史を後世に伝えるとともに、東アジアの青年たちの手による犠牲者の遺骨の発掘等を通して、交流の場にもしようという狙いで「笹の墓標展示館」が設置されている。　写真は展示館の主旨に沿う作品として今春から展示される予定の木彫『怒』。